

## 滋賀県フリースクール等連絡協議会



副会長 谷川 知さん



副会長 西村 静恵さん



山本 りかさん

滋賀県内の不登校や行き渋りのある児童生徒が、多様な学びの選択肢から各々に適した学びを得て健やかに育つことをより多くの力で支援すること、そのために、滋賀県内において、不登校児童生徒等に対しフリースクールや学習支援などを行う団体や不登校の親の会の運営者等が互いに連携し、行政等との協働を推進することを目的とし、2022年5月1日に発足。

2023年1月16日取材

Q どのような団体ですか？

**谷川 知さん** 滋賀県フリースクール等連絡協議会は、昨年5月1日発足しました。滋賀県内の不登校や行き渋りのある児童生徒を対象に活動しているフリースクールや学習支援などを行う団体、不登校の親の会の運営者などのネットワークで、県下の不登校支援に関して携わる者たちが集まる協議会になっております。

御承知のとおり、不登校児童生徒の数が全国的にどんどん増えている状態の中で、滋賀県でも同じく増加しています。学校の勉強だけではなく、多様な学びの選択から各々に適した学びを得て、健全に育ち、学ぶためには何が必要かを考える中で、これまでは1団体だけでフリースクールや親の会を運営していたわけですが、多くの力でそれを支えていくことを目的にしております。

Q 設立した経緯、きっかけは？

**西村 静恵さん** きっかけは、サポートブックを作り始めたことだと思えます。サポートブックはまず大津市から始めたと思うんですけど、現在4冊で、大津市とか、東近江圏域や湖北という形で、居場所とフリースクールというのを一つにまとめないといけないという話が上がって。まず大津市から始まりました。大津市が出来上がったときに、それぞれの地域で有志で作っていたところ、そこで同じように声が上がって、これをもっと大きくという

か、県全体でつなげたいという声も聞こえてきたりしたため、「じゃあ、つくろうか」という段階になったのかな。それはもう皆が同じように思っていたというか、求めていたことでもありました。まずは、当事者でも支援者でも、全部テーブルに上げられて目の前で見られるという状態にできたのかなと感じております。「誰が」とか「どこが」ということでなくて、皆が求めていたことだと思えます。



サポートブック

Q 地域や年齢で不登校に対しての捉え方は違ってくるのですか？

**西村 静恵さん** 本心にそうなんです。理解の度合いといいますか、もう端的に「学校行かんでどうすんの？」と言う人もいれば、「どうしたのかな？」と耳を傾けてくださる方もいて、そこはまちまちです。それは、ただ単に人ということではなくて、学校によっても違ったり、教育委員会によっても違ったり。教育機会確保法という法律ができてくるけれども、それが一律に理解されているわけではなくて、捉え方がまちまちだったり、まだ知らなかったりとか。法律があるからといって同じように対応してもらえないわけでは

なく、そこが浸透してないということが今問題になっています。

Q 協議会として共同のビジョンのようなものはありますか？

谷川 知さん

共同ビジョンについては、「不登校や行き渋りの子どもたちが多様な学びを得て健全に育ち、学ぶ」くらいだと思っています。それ以上、信条を共有化しようと思うと、なかなかまとまり切らないですし、私のイメージとしては、協議会というのは、いわゆる株式会社でいうとホールディングスみたいなもの。それぞれの団体の個性であるとか「こう思っているんだ」ということを生かしながら、ふんわりとした上をつくっていく。それぞれの団体の活動の意義があると思うので、何か一つにビジョンをまとめるとなると、どうしても外れていく団体が出てくると思うんです。

子どもの育ちという点でもそうで、学校に行きづらい子が今増えているというのは、「こつだよ」「みんなこれだよ」「みんなこれをやるんだ」とするか、(それに当てはまらず)あぶれていっちゃう子が出てくる。だから、一つのことを決めるというのは非常に慎重にしないと、そこから排除されてしまう、排斥されてしまう人を生み出すことにつながると思っています。

Q 活動の中で社会に思うことは？

山本りかさん

学校に行く・行かないでジャッジするのはもうやめたほうがいいというのはいすごく思います。多分、不登校は減らないと思うんですよ。これが減ると、今度は苦しむ子が増えるような気がしてまして。そうなる、自殺とひきこもりにつながるのかな。だから、行く・行かないではなくて、「行かない子に対してこういうサポートができるよ」というカードが(必要ですが)すごく少なくて。

うち(山本さん)は子どもも3人も不登校ですが、家ではすこい明るく楽しく、ミニフリースクールみたいな感じでわいわいやっていっています。小中高いるので、勉強を教え合ったりも時々ありますし。ただ、学校からのアプローチというのが、やるかやらないか分からないプリントを常に定期的に持ってきてくれるとか。持ってきてもらっても分からないし、できないんですよ。そういうのをずっと持ってくることで学校側は満足してはるのかわからないですけど、「みんな、これ、どうする？」と相談したりもするんですけど、学校に行かない子に対してもある程度の対応みたいなのがあればいいかなと思います。

不登校24万人のうち、フリースクールとか、そういう居場所に行ける子は公共の場所も合わせて3割もいないんです。7割以上の子が家から出られない子たちなので、そういう子たちの支援にもうちよつと力を入れてやらないと——「学校来なあかんよ。来たら、どうにかしてあげるよ」と。「じゃあ、

学校へ行けなくて、学校ができる支援って何かありますか」と聞いたたら、「ないです」と言われたんですけど。それがもう衝撃で、「あっ、そうなんだ」と思っています。「じゃあ、自分でどうにかするしかないな」ということで私はそっちのほうに振ったんですけど。

だから、もう本当じゃないですよ。学校に来るにはどうすればいいか」ばっかりにフォーカスすると、そこから動けなくて、子どもに対する支援がどうしても後手後手に回ってしまうような気もするので、学校に行かないことに対して「学校へ行かないから、そっちが悪いよね。自己責任だよ」という考えがすこい根深いような気もするんですけど、そうではなく、「学校へ行かなくても、こういう支援があるよ」というのがあればいいと思います。

西村 静恵さん

不登校に限らずですが、例えば「多様性だよ」というのが最近、どこでも聞かれるようにはなるんですけど、私は正直、多様性という場所を見たことがないんですよ。それをつくろうとしているとか。まあ、言えはするんだけど、実際そうなのではない場所はなかなか見つからない。条例にしても不登校対策にしても、本当に現実的なものであるようにしてほしいと思いますか、「その法律ができたこととどうなったよね」というようなことに、つなげていけるような社会になってほしいというか。

谷川 知さん

多様性を認め合える社会というのは、多様性がなから言えるわけですよ。多様性があれば「多様

性を認め合える社会を作ろう」とわざわざ言わなくていいので、「多様性、多様性と言っている間は、多様性はない」というのが事実だと思っただけですね。私たちが目指していく将来にあるベクトルの先、その矢印の先が多様性を認め合える社会であつたらいいなという話であつて、今、多様性が認められる社会であれば特段何も言わなくていいわけですから。

Q フリースクールの子どもたちは自分をどう思い、どのようなメッセージを発しているのか？

谷川 知さん

1つは、うちに来ているような子に関して言うと、まず自信がないです。ものすごく自信がないです。だから、調理実習とかで人参を切らせると「何センチに切ったらいい？」と。大き過ぎてても小さ過ぎててもみんな嫌だと言うかもしれない、「じゃあ、どう切ったらいいの？」と立ちすくむわけです。「どんな大きさに切ったって別に大丈夫だよ。みんな食べてくれるよ」というのが伝わらない、自分自身が腑に落ちてないので、「どうしたらいい？」「どうしたらいい？」と悩んでしまう。恐らく、学校の中で「よく責められたり、笑われたりしたのかもしれない。非常に自信がなくて、何をやるにしても、一歩前には出ないという子が非常に多いと思います。

将来についても、やはり自分自身にエネルギーが溜まってないと、それを外部に伝える言語化できる

能力が育ってないと感じています。

山本りかさん

つい大人って、いいか悪いかでジャッジしたくなるじゃないですか。学校の中も、テストがあつたり、「この子はいい子、この子は悪い子」で分け分けしたくなるかなと思っただけです。「遅刻する子はあかん子」とか「宿題をちゃんとしてくる子はいい子」とか。それでも、どうしても忘れ物をしちゃう子は忘れ物をしちゃうし、宿題できない子はできない。40人みんな一律に同じ宿題を出されて、「勉強が分からへん。でも、宿題やらなあかん」とか、そこにあぶれた子はもう学校へ行けなくなっちゃう。それに対するアプローチは「学校行かなあかんよね。学校行こうよ」と。全然根本の解決になつてないと思っただけです。

あと、朝起きられない子がいます。じゃあ、学校を昼からにしたらいかなとか10時始まりにしたらいかなとか、思っただけですけど、それはあり得ないじゃないですか。絶対学校は8時半から始まるって決まってる、そこにあぶれた子たちはもう絶対遅刻になっちゃって、それが甘えだとか言われるんです。でも、起立性調節障害という病名がつくぐらいの病気の子もいて、血圧が低くて朝起きられない、昼からスイッチが入るとい子もいますし。でも、そういう子はもう学校に行けないんです、8時半に絶対行かないとだめなので。それで遅れて行ったら、遅刻で怒られて、クラスの子から「何であいつだけ」と言われて。何かすごい行きづらいですよね。「じゃあ、学校から離れるわ」となると、「あかん子や」と。

「この子、もう未来ないわ」とか「将来どうすんの？」とか、すごい責められる。そうやって行かなくなると、もうついていけないから「復活するの無理」とか。そもそもそういう仕組みがどうかかなみたいな感じも。そこはなかなか難しいと思っただけで、「じゃあ、その仕組みをどうしたらいいかな」というふうにはならないんですね。結局、大人が子どもに合わせるのではなくて、「子どもが大人のつくったシステムに合わせないなら、もう学校は無理ね」というふうな。何かすごく大変だなと思っただけです。子どもたちが幾ら「こういうふうにしてほしい」と学校に望んだとしても無理なんです。そのシステムを変えてとかいうのは無理じゃないですか。

今、全国300校を目指して不登校特例校をつくるという話が、最近ニュースになつたんですけど、不登校特例校に入れる子と入れない子がいて。ある不登校特例校の先生と知り合いなんですけど、応募がもう何百人単位で来て、でも取れるのは40人で、倍率が4倍とかあつて、せっかく勇気を出して希望しても、結局入れないと。じゃあ、入れない子はどうなるんやろと。「不登校特例校をつくるので」「不登校特例校があるので」と大人は言うんですけど、入れられへん子はどうするんやろと思っただけです。「置き去りなん？」とか「もっと増えたら、またね」とか。でも、その子は中学3年間で、もう次行っちゃうと思っただけです、できるときには。何か置き去り感がすごいなと思います。それで子どもも「もう何を言っても変わらへんから無理なんや」と諦めのほうに行ってしまうという感じだと思います。

Q 不登校を減らしていくべきなのか、今ある様々な受け皿を整えていくべきなのか？

西村 静恵さん

子どもが選択できる形をつくるのが私自身はいいのかなと思っています。特に学校を否定してなくて、学校で過ごすことが一番心地いい子もいますし、さらにより多くの子どもたちが学校に来ることができるよう環境を変えてもらえらるならば、それはそれでいいと思います。ただ、不登校を減らすとか——いや、まだ子どもに求めるのかなと思うんです。例えば、アメリカのケンタッキー州だったかな。もちろん教育システムや仕組みも全然違うんですが、「不登校」という議論がないんです。それは何かというと、「学校は行かずにホームスクーリングに変えます」と言うと、教育委員会にそれなりの資料を提出して、「はい、オーケー」と。そしたら、強制ではないけれども、教育委員会からこれぐらいの種類のホームスクーリング用の教材があるということとを提示されて、その中から選ぶ。ビジネスとしてもホームスクーリングのカリキュラムがありますので、そっちを選ぶことができるんですよ。そうすると、不登校である・ないとか、学校に行っていない・行っていないとか関係なく、「ああ、あの子、学校へ行ってないんやね」と。例えば「あの子は山に行っているけど、あの子は海に行っている」みたいな違いだけの話で、そういう議論はないんですよ。だから、不登校という言葉自体なくなる環境があるといいのかなと私自身は思います。

山本 りかさん

通信制高校の情報オプチャ（オープンチャット）をやっています。そこに300人ぐらい入ってくださっているんですけど、当事者が入ってきて「お母さんを説得するにはどうしたらいいですか。今、全日に行っているんですけど、通信制に移りたいです。もう絶対無理なんです」と。「この子は、ここで通信制に入られへんかったら死んでしまうんじゃないかな」というぐらい深刻な子もいっぱいいるんですけど、そういう道、選択肢をいろいろ提示してあげるといのが、子どもを中心に社会ができることじゃないかなと思います。

だから、不登校やひきこもりが減ったら自殺が減るとか、そういうのではなくて、自殺に行く手前のときに「じゃあ、あなた、どこを選ぶ？」という選択肢をどれだけ出せてあげるか。だから「お母さん、情報持とうね」と言って。私も検索とか情報取るのがすごく好きなので、情報をいっぱいシェアしているんですけど、「ああ、そんな考え方があるのか」と。公共的などころもいろんな情報をシェアしてくださったらいいのになと思います。

谷川 知さん

不登校の改善や仕組みづくりについては、行政においては「魅力ある学校づくり」を進めるということだと思っています。これは当然進めていかれるところでしょうが、それと同時に私たちのような民間の取り組みについても、もうひとつの不登校改善のための方策として、車の両輪のようなものとして考えていただければと思っています。不登校の子ども

は学校へ行きたくないわけじゃなくて、行けるような学校であるなら行きたいと思っています。来年の四月から魅力がアップします」というのは「来年の四月段階的なものであったり、誰にとっても魅力あるというのなかなか難しい気もします。SSSでいう誰一人残さないということが重要なのであり、今、学校に行けなくなっている子どもたちをどうするかというときに、やはり民間のリースクールという選択肢が出てくることになると思います。だから「魅力ある学校づくり」もする、民間のリースクールもひとつの選択肢としてサポートしていくというのが良いのではないかと思います。不登校になってリースクールを選ぶときにあまりにもそれが不利な選択になるとやはり良くないと感じます。義務教育中については保護者の経済的な負担というの雲泥の差になりますし、社会的な見られ方というのも変えていかなければならない。内申や進路の選択についても不利になる、そういったことであまりに差をつけられると不登校の子どもたちが気の毒だと思います。

リースクールというのはちっぽけな存在ではありませんが、不登校の子どもたちの精神的なサポートの役割を果たしていたり、仲間作りが可能になったり、生きづらさを解消するためには重要な存在となっています。人間というのはやはり社会的な存在なので不登校になって孤立したり、自分のことは誰もわかってくれないと感じると、精神面で不安定になったり自殺につながる懸念も生じたりします。「一条校（法律に定める学校）だったら、ほぼ無償で

す」「学校に行っていたら高校にはおそろく行ける」  
「公立高校には行って、頑張ったら大学にも行ける、就職もできます」という道がある程度決まっていることは、フリースクールに行っている子どもにとつてうらやましいと感じる部分もあります。「僕だつて、行けるものなら学校に行つて、そういう平坦に見える道を歩みたかつた、なにもいばらの道をすき好んで選んでるわけではない。でも、どうしても今の学校には行かれない、この環境は本当に無理なんだ」という子もいます。そういう子どもがフリースクールだったり、ホームスクーリングを選んだりしているわけです。現状、一条校に行っている子どもとフリースクール等を選ぶ子どもを比べるとあまりにバランスが悪く、すこしくらい肩を並べられる程度に経済的な負担を軽減していただいたり、環境を整えていただきたいと思えます。それはどうしても、民間にはできないことですし、協議会でも声をあげることができても実行できるものではない、行政にしていただかないとできないことだと思えます。

